

フランソワ・ブニョン著『赤十字標章の歴史』の訳出

井上 忠男

Japanese translation of “The emblem of the Red Cross—A brief history”  
by François Bugnion

Tadao INOUE

要旨：赤十字標章は、1864年のジュネーヴ条約で初めて採択された戦時に活動する医療組織とその資機材を保護するための国際特殊標章である。この標章が効果的に使用されるためには、誰もが理解できるように、あらゆる国で同じ統一標章でなければならないはずであった。にもかかわらず、今日では、赤十字、赤新月、赤の水晶という3つの標章が共存するようになった。なぜこのような状況に至ったのか。本書は、国際会議の議事録から赤十字標章の歴史とその統一性が損なわれてきた歴史を辿り、保護標章を尊重する必要性と意義を明らかにする。

キーワード：赤十字標章、保護標章、ジュネーヴ諸条約、医療組織、歴史

**Abstract:** The Red Cross emblem is an internationally distinctive emblem, which was first adopted at the Geneva Convention of 1864, in order to protect the medical services and their resources while mobilized on the battle field. For the emblem to be effectively used and respected, the emblem had to be the same everywhere and known to all. Nevertheless throughout the course of the history, the universality of the emblem has eroded and recently we have come to see three different symbols, namely, the red cross, the red crescent and the red crystal. Why has such a situation come to exist? This book is an attempt to trace, through the records of international conferences, the history of the Red Cross sign and of the erosion of its universality, thereby shedding light on the need for significant respecting of the emblem.

**Key words:** Red Cross emblem, protective emblem, Geneva Conventions, medical unit, history

### 1. 本書の概要

世界中で広く知られている赤十字標章（The Red Cross emblem）は、戦場で傷病兵の医療救護活動に従事する医療要員や医療施設・資機材を識別して保護するために1864年のジュネーヴ条約で初めてその使用が認められた国際的な識別標章である。

赤十字標章は、赤十字の創設者であるアンリ・デュナンの祖国スイスに敬意を表し、スイスの国旗の色を逆転して採用された宗教的な意味のない標章とされてきた

しかし、今日では赤十字標章のほか、多くのイスラム教国が赤十字の代わりに赤新月（Red Crescent）標章を使用することが認められ、さらに2005年12月8日に採択されたジュネーヴ諸条約第三議定書により、赤十字と赤新月のどちらの標章の使用も望まない国は、赤の水晶（Red Crystal）標章を使用することが認められた。

戦時において医療要員等を保護する国際的な保護標章は、世界共通の唯一の標章であることが望ましいはずだが、なぜ、これら三つの標章が並存するようになったのか。その歴史的経緯を当時の

国際会議の議事録から解き明かしたのが本書である。そこには赤十字の誕生から百年以上に亘り議場で繰り広げられてきた国家間の“人道のシンボル”を巡る攻防の歴史がある。

## 2. 著者について

筆者のフランソワ・ブニヨン氏は、赤十字国際委員会法務原則部次長、同委員会国際法・協力部長、国際赤十字・赤新月運動常置委員会委員などを務めた赤十字の重鎮であり、赤十字や赤十字標章の歴史に関する多くの著作を送り出している。2007年には、本書の改訂版ともいえる『Red Cross, Red Crescent, Red Crystal』（赤十字国際委員会刊）を執筆したが、赤十字標章を巡る初期の国際的議論については本書の方が詳細に記述されており、本書は現在でも赤十字標章の歴史に関する最も基本的な文献として定評がある。

とはいえ、本書は1977年に刊行されたものであるため、1970年代以降の赤十字標章を巡る議論を補足し解説するために「訳者による補記」として『赤十字標章を巡る現代の状況と赤のクリスタル標章の採用』と題する章を補足した。

## 3. 本書の意義

赤十字標章は、戦時において医療救護活動を確実に保護するためにも平時から適正に使用し管理することが必要であり、ジュネーヴ諸条約と同追加議定書並びに各国の国内法にはその使用を厳しく制限し、戦時における保護標章の背信的使用はジュネーヴ諸条約の重大な違反行為とされる。赤十字標章の意味を正しく理解し、使用するためにも標章の歴史を知ることが不可欠であり、本書を通じて赤十字標章の意義と価値について人々の理解が一層深まることを期待される。

## 4. 謝 辞

なお、ジュネーヴの赤十字国際委員会の翻訳許可取得にあたりご尽力をいただいた赤十字国際委員会駐日事務所の眞壁仁美氏に御礼申し上げる。

## 5. 目 次

原著者はしがき

1. 標章の統一
2. 起源
3. ロシア・トルコ戦争（1876-1878）

4. 平和会議とジュネーヴ条約の改訂（1899年、1907年のハーグ会議；1906年のジュネーヴ条約）
5. 1929年の会議
6. 1949年の会議
7. 近年の発展（1949年-1976年）

## 第二章 赤十字社の標章

1. 各社の承認
2. 未承認標章
  - アフガニスタン
  - キプロス
  - インド
  - イスラエル
  - 日本
  - レバノン
  - スーダン
  - スリランカ
  - シリア
  - タイ
  - ソビエト連邦
  - ザイール

## むすび

1. 現状
2. むすび

## 訳者による補記

- ・赤十字標章を巡る現代の状況と赤のクリスタル標章の採用

本稿は、標記研究の成果として平成24年9月10日に榊東信堂から『赤十字標章の歴史～“人道のシンボル”をめぐる国家の攻防』として刊行されたので詳細については同書を参照ください。